

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520835

研究課題名（和文） マルセル・モース人類学の現代的再評価

研究課題名（英文） Actuality of anthropological thought of Marcel Mauss

研究代表者

渡辺 公三（WATANABE KOZO）

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：70159242

研究成果の概要（和文）：フランス人類学の定礎者マルセル・モース（1872-1950）はデュルケームの甥であり、フランス穏健社会主義の指導者ジョレスの盟友であり、ロシア共産主義の厳しい批判者であった。その人類学分野以外での活動もふくめて思考の変遷を、同時代の動向、学問の動向、学派（デュルケーム学派社会学）の進展との関係を視野に入れて明らかにし、現代思想としての人類学の可能性を検討する。そのうえでモースの主要業績を明晰判明な日本語に翻訳する。

研究成果の概要（英文）：The founder of modern French anthropology, Marcel Mauss(1872-1950) was nephew of Durkheim, comrade of Socialist leader Jaures, as well as virulent critic of Russian Bolchevism. We retrace the development of his thought, not only in anthropology but also in all the aspects of his idea about the contemporary world, the dynamism of social and human sciences, to extract the new possibilities for anthropology as a criticism of sciences. We try in the same time, to translate his main works in clear and articulated Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：マルセル・モース、贈与・交換、フランス社会学、MAUSS、民族誌、ナシオン、植民地主義、

1. 研究開始当初の背景

フランス人類学の定礎者であるマルセル・モースの業績は、死去の年 1950 年に『人類学と社会学』と銘打って刊行された論文集によって現代人類学に多大の影響をあたえてきた。その後、フランスでいわゆる構造主

義の退潮期にさしかかった 1960 年代終わごろ、次いで経済におけるネオリベラルな傾向が表面化しはじめる 1980 年代、さらに 21 世紀に入ったこの 10 年ほどというように何度か繰り返して再評価と再読の対象となってきた。モースへの最初の再評価は『人類学

と社会学』に付されたレヴィ=ストロースの「マルセル・モースの業績への序」の衝撃を無視しては語れない。この序論はモースを構造主義の先駆者としてかなりの説得力をもって位置づけた。とはいえそれが公刊された1950年という年が示すとおり、この時点ではレヴィ=ストロースの構造主義が『野生の思考』や『神話論理』の刊行によって人類学のみならず、現代人文社会科学に決定的な影響をあたえるにはさらに10年あまりの時間が必要であり、モースの再評価が本格化したのは、1960年代末のKaradyによる『モース著作集』の刊行以降であった。この刊行によって初出のさまざまな紀要や学会誌に分散したままであった人類学分野でのモースの業績はほぼ網羅的に概観することが可能となった。

1980年代には経済合理主義や自由主義の経済学への批判をモースの「贈与論」の議論に依拠して展開しようとするモースの名を冠した「MAUSS：社会科学における反功利主義運動」がアラン・カイエを中心に結成され、フランスにおいて経済学に限られない広範な社会科学における批判的学知の結節点を形成し現在にいたっている。こうした関心の持続の中で1994年に、マルセル・フルニエが大部なモースの評伝を刊行し、20世紀前半までの欧米における知的リーダーたちの伝記的研究の流行の驥尾に付した。3年後、同じフルニエはモースの政治的分野での論考を集成した『政治論集』を編集刊行し、これによって人類学にとどまらないモースの仕事の軌跡がようやく検討できる条件が整うことになった。

モースの業績はモースの講義に参加したきだみのるによる「贈与論」の翻訳を皮切りに法学分野からの再訳を経て人類学分野からの再々訳と文庫化によってある程度普及してきた。しかし、「贈与論」に限定してもモースの同時代の第一次世界大戦前後の経済学の動向と、同時代の広範な民族誌、ローマ法、ヒンドゥー法などを参照したその文章はとうてい十分な文献批判を経て作成された物とは言い難い。とりわけモースの政治論の内容との連関を踏まえて訳稿を作成することを計画した時、既訳がモースの思考の深く正確な把握に基礎をおいているかはいへんころもとないといわなければならない。

代表者にとっての個人的な経緯を若干記述したい。代表者は駆け出しの人類学見習いとしてフランス留学中の1970年代末からモースに関心をもち、自らの現地調査への備えの意味もあってモースの『民族誌への手引』を訳読し、私訳を完成した。80年代にも持続したモースへの関心から当時日本では比較的入手しにくかったロシア革命論を中心と

する政治関係論文のコピーも収集を試みた。

『民族誌への手引』の私訳原稿の存在を知り、それを一巻としてふくむモース著作集の刊行の計画を、平凡社の編集者松井純氏と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の真島一郎准教授から提起され、まず、当研究所の所内プロジェクト「マルセル・モース研究—社会・交換・組合」としてモース著作の刊行を視野に入れた研究プロジェクトが発足した。その終了をうけて申請し採択されたのが本研究である。

2. 研究の目的

上記の「マルセル・モース研究—社会・交換・組合」においては明晰・判明な日本語にあたうかぎり広範にモースの思考を翻訳することを目標に立て、その基礎となる研究を構築することを目指した。そのためにモースのほぼ半世紀にわたる業績を原則として編年で全5巻の著作集として編集すること、刊行順序を検討すること、全巻を通じた語彙の統一の方法、そして何よりもモースの思考の深い把握が目指された。その成果の一端が平凡社新書『マルセル・モースの世界』である。

いくつかの紆余曲折はあったが第一回刊行と計画された「贈与論」含む第三巻の刊行を目的とした。1925年にデュルケーム派フランス社会学の紀要の第二期第一巻『社会学年報』に掲載された「贈与論」を読み、訳すためには

(1) 第一世界大戦後のハイパーインフレのドイツ経済の破綻に対する同時代的経済学の動向と所見を参照し、今日の経済史学からのこの時代の評価を参照し、その成果の文脈にモースの議論を位置づけなければならない。そのために

(2) モースの政治論の中から、とりわけ「贈与論」前後に大衆紙あるいは穏健社会主義の機関紙(1920年代初頭には社会党とロシア共産党に同調するフランス共産党が分裂し、当然ながらモースは社会党に残った)に掲載された通貨問題への時評を解読しその内容評価を試みなければならない。

(3) 「贈与論」が解析する同時代の民族誌を可能な限り参照し、出典を確認すると同時にモースの注目点の特徴を明確にしなければならない。

(4) 民族誌の解読から引き出された経済行為の源泉としての「贈与と交換」(それはモースの同時代経済学が経済行為の暗黙の前提とする市場交換をはるかに越え出る行為と想定される)を経済認識論の起点におこうと提起する MAUSS 集団の議論を検討しモースの議論の射程を確認しなければならない。

(5) 経済行為の源泉としての「贈与と交換」がいかにして法的な概念に固定化されたか、という問いを人類史的なスケールで追求す

るという意図をモースはもっていた。その発露がローマ法と古代ヒンドゥー法への検討である。ラテン語、サンスクリット語の文献の文献検討をふくむモースの論述の理解には、これら古典語の理解力が必要となる。

(6) これらすべての論点は20世紀末に破綻した社会主義のロシア共産党ヴァージョンを厳しく批判したモースの社会主義ヴィジョンをどう再評価するかという問いに直結する。

(7) 以上の理論的論点とは少し質を異にするが、モースが検討対象とした19世紀末～20世紀初頭の民族誌は今日、かなりの数がネット上でオリジナルテキストが参照できる状態にある。またモースと同時代の経済学の基本文献などにもそうしたものが多くなっている。これらのネット上の参考資料情報を翻訳刊行するモースのテキストにどのように統合するかという今後の学的テキスト刊行のありようにかかわる、けっして小さくない課題が鮮明に浮上した。

3. 研究の方法

(1)(2)(3)(4)(6)については研究代表者および連携研究者、研究協力者の全員の課題として研究会においてそれぞれの成果、見解をもちよるかたちで進めた。なおこの間海外への赴任をしていた連携研究者真島一郎とは定期的にスカイプ等での会議および一時帰国の機会を利用して会を開催した。

(5)のうちラテン語とローマ法にかかわる部分は代表者が大阪大学法学研究科の当該分野の専門家である林智良教授に専門知識の提供を願う形で検討した。ヒンドゥー法については連携研究者の高島淳が分担した。また(7)の課題についてはネット研究環境に詳しい高島淳が中心に検討を進めた。

4. 研究成果

連携研究者および研究協力者はそれぞれの課題を追求しつつ多様な場で成果の公刊をおこなった。

「贈与論」およびそれに前後するいくつかの小論文をふくみまた、1950年の『人類学と社会学』へのレヴィ=ストロースによる序論の再訳をふくむ著作集第三巻は第二校の段階にたどりつた。

しかし、きわめて残念なことにこの段階にいたって翻訳叙述の文体、訳語の選択、それぞれの専門についての見解の相違から第三巻を最終的に完成し刊行するにいたらず、2012年末から研究体制再構築のための作業が続いている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

真島一郎、鏡像のエネルギー危機 セネガルから、SEEDer、査読無、8巻、2013、68-72

関一敏、呪術とは何か 実践的展開のための覚書、査読無、白川・川田編『呪術の人類学』、人文書院、2012

溝口大助、マルセル・モース 社会主義・労働・供犠、POSSE、査読無、14巻、2012、168-185

渡辺公三、占領下に生きる モースの一九四二年のふたつのテキスト、月刊百科、査読無、583号、2011、8-17

真島一郎、モース・エコロジック、現代思想、査読無、39巻16号、2011、136-152

真島一郎、渡辺公三、「経済」を審問する 西谷修編著『経済を審問する 人間社会は「経済的」なのか』、せりか書房、査読無、138-229(アラン・カイエを囲むラウンド・テーブル、日仏会館)、2011

〔学会発表〕(計6件)

高島淳、マラーラム語とカンナダ語の電子辞書作成について、国際ワークショップ『日本語ドラヴィダ語対照文法と辞書』、2013年1月30日、東京

溝口大助、贈与論と供犠論 「聖なるもの」と「霊的なもの」を手がかりに、贈与論再考 「贈与」「交換」「分配」に関する学際的研究、2013年1月20日、大阪

真島一郎、力の翻訳 人類学と日本初期社会主義、第28回京都賞記念ワークショップ、2012年11月12日、京都

関一敏、宗教学、社会学、民俗学の誕生 ヨーロッパと日本の共振、日本宗教学会第71回学術大会、2012年9月8日、三重

渡辺公三、贈与論の歴的文脈、文化人類学会近畿地区研究懇談会、2012年3月29日、京都

Kozo Watanabe, Forclusion du sacrifice chez Levi-Strauss ? Recherche mimetique, 2012年1月27日、Paris

〔図書〕(計2件)

著者名：昼間賢(訳、原著、アンドレ・シェフネール) 出版社名：みすず書房、書名：始原のジャズ、発行年：2012、総ページ数：248

著者名：モース研究会、出版社名：平凡社 書名：マルセル・モースの世界、発行年：2011 総ページ数：283

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 公三(WATANABE KOZO)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授
研究者番号：70159242

(2)研究分担者

高村 学人 (TAKAMURA GAKUTO)
立命館大学・政策科学部・准教授
(2010年度)
研究者番号：80302785

(3)連携研究者

連携研究者：真島 一郎
連携研究者：高島 淳
連携研究者：関 一敏
連携研究者：昼間 賢
研究協力者：溝口 大助
研究協力者：佐久間 寛